

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 中級日本語学習者の視点は母語によって異なるか： I-JASのストーリーテリングのデータの分析から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-01-15 キーワード (Ja): キーワード (En): learner corpus, subject alternation, viewpoint expression, fixed viewpoint, moving viewpoint 作成者: ダンタイ, クインチー, DANG THAI, Quynh Chi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002543">https://doi.org/10.15084/00002543</a>

## 中級日本語学習者の視点は母語によって異なるか —I-JAS のストーリーテリングのデータの分析から—

ダンタイ クインチー

国立国語研究所 研究系 日本語教育研究領域 非常勤研究員

### 要旨

本研究では、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS) のストーリーテリングのデータを用いて、アメリカ人、中国人、韓国人、ベトナム人の、各中級日本語学習者の母語による視点の相違について検討した。その結果、主語の観点から見ると、学習者の各群は多くの場面で、特に新しい登場人物が出現する場面で主語を交替させる傾向があり、その傾向は母語によって異なることが明らかになった。述語の観点から見ると、述語における視点表現の使用量と使用形態が母語によって異なることがわかり、それぞれの学習者群の母語からの影響も観察された。述語の視点表現の選択傾向から談話全体での視点の置き方を見ると、アメリカ人日本語学習者は学習者の各群の中で、固定視点の割合がもっとも高いのに対し、中国人日本語学習者は移動視点の割合がもっとも高く、韓国人日本語学習者は移動視点の割合と中立視点の割合が同様で、ベトナム人日本語学習者は中立視点の割合がもっとも高いことがわかった\*。

キーワード：学習者コーパス、主語交替、視点表現、固定視点、移動視点

### 1. はじめに

第二言語学習者の言い回しがしばしば母語話者とかけ離れてしまうのには、言語運用におけるそれぞれの話者の視点の問題が深く関わっていると思われる。つまり、同じ事態であっても、それをどのように把握し、どのように言語化するかは、学習者の母語によって、視点の把握と選択に違いが見られると思われる。学習者にとって目標言語の視点把握は、母語の影響を受けるために習得が非常に難しい。例えば、日本語教育の現場では、どの日本語教育機関でも比較的易しい受身表現だけではなく、授受表現、移動表現などの視点を表す文法を初級レベルから導入している。しかし、実際には、すでに初級コースを学び終えた学習者であっても、授受表現の「～してもらう」「～してくれる」、移動表現の「～していく」「～てくる」を簡単には產出できない。文法的な誤りがない場合でも、学習者、特に中級学習者の発想に、母語話者は違和感を抱きがちである。そこで、本研究では、母語の影響とその習得上の問題を解明することを目的として、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS) のストーリーテリングのデータを用いて、日本語学習者の視点の把握と選択が、母語によりどのように異なるか分析を行う。母語による視点の把握と選択の違いを明らかにし、対象となる母語の日本語学習者のみならず、日本語学習者一般への指導法の確立を目指す。

\* 本研究は、国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」(プロジェクトリーダー：石黒圭) の成果である。データをご提供くださいました協力者・学習者の皆様に厚く御礼申し上げる。また、ご指導を頂いた指導教員の石黒圭教授(国立国語研究所)に厚く御礼申し上げる。

## 2. 先行研究

### 2.1 視点の概念

石黒（2006: 219）は、「視点とはいきつかの概念を抱えこんだ用語」であり、「視点には、知覚にかかる狭義の『視点』以外にも、文法的な『立場』、学術的な『観点』、小説の『語り』といった意味が含まれている」ため、視点という用語が何を指しているか、「その概念を整理することによって視点とは何かが見えてくる」としている。

言語学の用語としての視点に関する概念は研究者によって異なったところがある。言語学に「視点」という概念を初めて本格的に導入したのは久野（1978）である。久野（1978）は「視点」を「カメラ・アングル」という言葉で説明し、「共感度」という概念とともにその後の視点研究に大きな影響を与えている。久野のカメラ・アングルは、話者の「共感度」(Empathy) により、どの指示対象者寄りに設定されるのかが決定されるというものである。

茂呂（1985）は、「視点」と「視座」を区別しない久野（1978）と違い、発話における視点について論じる際には、「だれ（視点人物）が、どこ（視座）から、何（注視点）を見るのか」を考慮しなければならず、その結果から最終的にどのような状況が見えているのかを把握できると主張している。松木（1992）は、久野の言う「視点」を「認識的視点」として区別し、「視座」及び「注視点」という役割を文法研究に取り入れることで、「感情移入に基づく心理的視点だけでは説明しきれなかった様々な文法現象が、多少でも明らかになるのではないか」(p. 69) と述べている。

### 2.2 視点に関わる実証的研究

実証的研究として、学習者の習得の問題としての視点の置き方を調べる研究が盛んに行われている（田代 1995, 渡邊 1996, 魏 2010, 渡辺 2012, レ 2018）。そうした研究には次の共通点がある。

- 調査に用いた手法は、漫画描写あるいはアニメーション描写といった物語描写による手法が多い。
- 分析データは、口頭より文章による産出が多い。
- 視点表現を通じて話者の視点の置き方を判定する研究が多い。しかし、視点表現として扱っている文法的形態は研究者によって異なっている。大塚（1995）は「ていく、てくる、(て)あげる、(て)もらう、(て)くれる、受身、使役、てしまう」という構文的形態を通じて中上級日本語学習者がどのように立場志向文を用いるかを調査している。中浜・栗原（2006）は、ヴォイス、授受表現の他に、さらに移動表現、主觀表現、準感情表現、感情表現という4つの視点表現を加え分析している。武村（2010）は受身表現、授受表現、移動表現、主觀表現、感情表現の他に、「借りる」を構文的形態に加えている。
- 分析対象としての視点は、視座（話者の見る立場）と注視点（話者の見る対象）の2つに分けて捉える研究がほとんどである。
- 学習者の視点の置き方は日本語母語話者とどう異なっているか、これについて従来の研究の基

本的な類似点は、次のとおりである。謝（2006）では、日本語母語話者は視座を固定させるのに対し、中国人日本語学習者と中国語母語話者はともに移動させる傾向があるとしている。金（2008）では、注視点の設定においては、韓国人日本語学習者では熟達度に関わらず母語からの転移が見られたが、視座の設定は、熟達度が高い学習者の方が日本語母語話者により近くなると述べている。レ（2018）では、ベトナム人日本語学習者は、物語描写の文章においてレベルに関係なく文ごとに注視点が頻繁に移動し、また日本語母語話者の文章より視座の一貫性が弱いことを明らかにしている。

このように、韓国語、中国語、ベトナム語をそれぞれ母語に持つ日本語学習者の視点の特徴について、日本語母語話者との比較で明らかにした研究は少なくない。しかし、多言語母語の日本語学習者を対象とし、相互に比較した調査は、管見の限りでは渡邊（1996）と矢吹ソウ（2017）しか見当たなかった。その中で、渡邊（1996）は、日本語母語話者群と韓国人・中国人・ドイツ人の中上級日本語学習者群を対象に、7つの漫画の描写を口頭で語ってもらい、談話の展開を通じて視点を視座と注視点に分けて判断させた貴重な研究である。その結果、日本語母語話者群は「ある人物寄りの視点」、韓国語話者群は「遠距離一焦点の視点」「中立視点」、ドイツ語話者群と中国語話者群は「中立視点」を取る傾向があることを示した。しかし、渡邊（1996）では、調査対象者の人数は各群5名と、かなり少なかった。一方、矢吹ソウ（2017）では、カナダの大学で日本語を学ぶ学習者計45名（母語は英語・中国語・韓国語の各15名）、および日本語母語話者15名を対象として漫画描写の作文における視点表現の使用の傾向を明らかにした。しかし、矢吹ソウ（2017）では、母語による違いや母語の影響が十分には考察されていないように見える。

### 2.3 類型論から見る言語の主観性

事態把握の仕方に関して、池上（2012）では、〈主客合一〉的事態把握（主観的把握）と〈主客対立〉的事態把握（客観的把握）に分けている。〈主客合一〉的事態把握は、話者が事態内に身を置き、当事者として体験的に事態を把握する。〈主客対立〉的事態把握は、事態の外に身を置き、傍観者、ないし、観察者として客観的に事態を把握する。

類型論からみると、日本語と比較して英語、中国語、韓国語、ベトナム語は次のような特徴があるとされている。

表1 類型論からみた日本語と他の言語の間の主観性

	日本語	英語	中国語	韓国語	ベトナム語
森（1998）	主観的把握	客観的把握			
彭（2008）	主観的把握		客観的把握		
福島（2018）	主観的把握			客観的把握	
レ（2018）	主観的把握				客観的把握

上表の先行研究から見ると、英語、中国語、韓国語、ベトナム語、いずれの言語も、日本語に

比べて事態把握において客觀性が高い言語である。しかし、そう結論されたとしても、言語間、またそれぞれの言語表現には、主觀性が高いか、客觀性が高いかにおいて程度差があり、はつきり区別できないところが多いと思われる。趙（2016）では、日本語、英語、中国語の主觀性を検討した上で、次のような結論を得ている。

事態の捉え方は大きく分けて主觀的と客觀的にわけることができ、日本語は主觀的なほうに属し、英語は客觀的なほうに属すといってよからう。中国語に関しては、まだはつきりした位置づけはされていないようだが、どちらかといえば、英語に近いと言えるようである。

趙（2016：57）

やはり、主觀性の程度を見るために、複数の言語を対象に詳細に対照する必要がある。母語の事態把握の特徴は、学習者の視点の捉え方に影響するため、類型論から見た各言語の主觀性を把握し、学習者の発想に母語からの転移があるかどうか検討する必要があろう。

#### 2.4 本研究の理論的枠組みと研究課題

上記で述べているように、視点は意味が広い概念なので、言語学でも視点の特徴を見るためには、様々な角度や観点から見なければならない。本研究は、漫画描写の手法による調査のため、あくまでも話者の視点（見る場所：視座）は漫画（物語）の外に存在しており、そこから漫画の登場人物（見られる対象：注視点）を見ていると考えられる。そこで、話者は自分との共感度がもっとも高い人物に近づき、視点（視座）を寄せて描写するものである。つまり、漫画の特性で視座が注視点に寄って行くので、本研究では、話者の視点を視座と注視点に分けず、久野（1978）にならい、カメラ・アングルとしての話者の共感度という視点から分析を行う。

また、話者の発想の構造を考えると、認知と言語は密接な関係があると見なせる。文には通常、主語を含む主部と述語を含む述部がある。カメラ・アングルとしての話者の視点は主部に寄っていくのが一般的で、主部は話者が何に注目しているかという認知の中核を示す。一方、述部は、主部についての状態・動き・変化等を示す。塩谷（2006）によると、こうした基本的認知を反映した文の基本構造に、様々な修飾語、価値判断、モダリティなどが重なって、多様な文が作られるという。そのため、話者の視点の特徴を総合的に明らかにするために、主語（下記（1））と述語（下記（2）と（3））の特徴を分析していく。

##### (1) 主語の選択：誰を主語に取るか

話者が漫画を見るとき、話者の目はどのように動いていくのか。すなわち、どのような人物が話者の見る対象になるのか。それによって、主語の捉え方が異なってくるので、主語の取り方を分析する必要があると思われる。

##### (2) 視点明示表現の選択：視点を明示する統語的な視点表現を用いるか

##### (3) 主觀表現の選択：視点の存在を暗示する主觀的な表現を用いるか

話者がどの人物を主語として扱うのか、さらに話者がどの人物に視点を寄せて描写するのかによって（2）視点明示表現を用いるか否か、（3）主觀表現を用いるか否かの選択が異なってくる。そこで、以下の3つのリサーチ・クエスチョン（以下RQ）を設定した。

日本語母語話者と比較して、

RQ1：主語の選択に関して、多言語を母語とする日本語学習者の中に、それぞれの母語によるどのような共通点、どのような相違点があるのか。

RQ2：述部にある視点表現の選択に関して、多言語を母語とする日本語学習者の中に、それぞれの母語によるどのような共通点、どのような相違点があるのか。

RQ3：談話の視点の一貫性に関して、多言語を母語とする日本語学習者の中に、それぞれの母語によるどのような共通点、どのような相違点があるのか。

### 3. 調査の概要

#### 3.1 使用するコーパス及び研究対象者の絞り込み

本調査で使用したデータ『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS) の概要は以下のとおりである。

- 異なる12言語を母語とする海外の日本語学習者、および日本国内の教室環境学習者・自然環境学習者の発話データと作文データを横断的に収集し、収録したコーパスである。
- 1人の学習者に対して、口頭によるタスクとして、4種類6タスクを行っている。①ストーリーテリング（2タスク）、②対話（約30分）、③ロールプレイ（2タスク）、④絵描写である。その他に作文によるタスクも存在する。

ストーリーテリングというタスクは、提示されたイラストのストーリーを話すというもので、「ピクニック」と「鍵」という2種類の漫画が用いられている。本研究は、図1（次頁）の「鍵」というタスクのデータを用いて、談話での視点の展開を検討した。図1の「鍵」を選んだ理由は、視点に関わる文法項目（受身表現や自他動詞など）の産出の可能性が高いと予備調査の結果から確認できたためである。

I-JASは、異なる12言語を母語とする日本語学習者に調査を行っているが、本研究はアメリカ人日本語学習者(EUS)、中国人日本語学習者(CCM)、韓国人日本語学習者(KKD)、ベトナム人日本語学習者(VVN)に対象者群<sup>1</sup>を絞ってデータを分析した。また、本研究は第4次公開(2019年5月10日)のデータを用いた。日本語能力判定テストSPOTの結果<sup>2</sup>に基づいて、

<sup>1</sup> 本稿で対象者群を述べる順番はアルファベット順で並べている。(A) American (EUS), (C) Chinese (CCM), (K) Korean (KKD) と (V) Vietnamese (VVN)

<sup>2</sup> SPOTは筑波日本語テスト集(Tsukuba Test-Battery of Japanese)の一つである。SPOTの判定によると、中級レベルに当たる得点は56点から80点である。

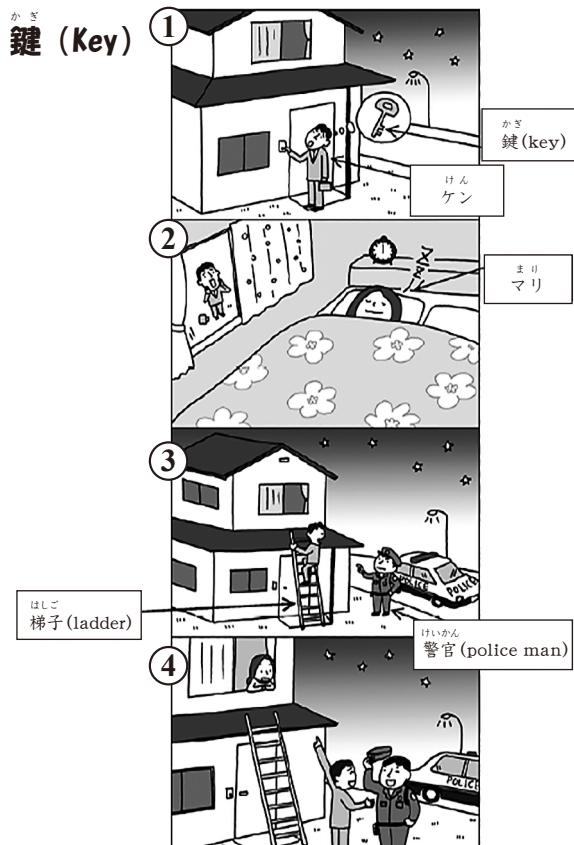


図 1 I-JAS のストーリーテリングタスクで使用された漫画

表2のように、初級または上級学習者を外し、中級学習者のデータのみを対象とした。

表2 本研究で対象とする調査対象者の人数

	アメリカ人日本語 学習者 (EUS)	中国人日本語学習者 (CCM)	韓国人日本語学習者 (KKD)	ベトナム人日本語 学習者 (VVN)
該当する調査 対象者の人数	13	41	26	28

抽出した中級日本語学習者の人数はばらつきがあり、中級レベルに当たるアメリカ人日本語学習者は 13 名になったので、日本語母語話者も含めて、ランダムに各グループから 13 名を取り出した。調査対象者の属性は表3のとおりである。

表3 I-JAS の対象者別の属性

グループ	I-JAS の対象者の番号	身分	日本語専攻	SPOT 平均	滞日経験	人数(男女内訳)
アメリカ人日本語学習者(EUS)	EUS01-02, EUS11, EUS13-15, EUS17, EUS24, EUS33, EUS35, EUS46-47, EUS50	全員学生	主専攻 10名 その他 3名	中級 66.9 点	5名:無 8名:旅行 ／短期留学	13名 (男性7名, 女性6名)
中国人日本語学習者(CCM)	CCM04, CCM06, CCM08, CCM10, CCM12, CCM23, CCM39, CCM42-43, CCM45, CCM47-49	全員学生	主専攻 13名	中級 71.5 点	10名:無 3名:旅行	13名 (男性6名, 女性7名)
韓国人日本語学習者(KKD)	KKD02, KKD06, KKD14, KKD18, KKD20, KKD26, KKD30, KKD37-38, KKD47, KKD50, KKD52, KKD55	全員学生	主専攻 7名 その他 6名	中級 71.1 点	2名:無 11名:旅行	13名 (男性7名, 女性6名)
ベトナム人日本語学習者(VVN)	VVN12, VVN16, VVN21, VVN24, VVN26, VVN29, VVN31, VVN33, VVN43-44, VVN47, VVN49, VVN51	全員学生	主専攻 13名	中級 64.3 点	7名:無 6名:文化 交流／短期 留学	13名 (男性2名, 女性11名)
日本語母語話者(JJJ)	JJJ02, JJJ04, JJJ09, JJJ16, JJJ21, JJJ24, JJJ31, JJJ35, JJJ37, JJJ39, JJJ44, JJJ46-47	学生3名 非学生9名, 未回答1名	—	—	—	13名 (男性5名, 女性8名)

また、学習者が母語でどのようにストーリーを語るか検討するために、日本語習得経験のないアメリカ人母語話者、中国人母語話者、韓国人母語話者、ベトナム人母語話者のデータを、筆者が独自に追加で収集した。各母語話者の基本情報は表4のとおりである。

表4 筆者が追加調査で収集した各母語話者のデータの属性

母語話者の別	身分	母語	専攻	人数(男女内訳)
英語母語話者(EN)	全員学生	英語	経済、IT等	13名(男性6名, 女性7名)
中国語母語話者(CN)	全員学生	中国語	言語文化学、経済等	13名(男性2名, 女性11名)
韓国語母語話者(KN)	全員学生	韓国語	言語文化学、文学等	13名(男性3名, 女性10名)
ベトナム語母語話者(VN)	全員学生	ベトナム語	経済、文学等	13名(全員女性)

### 3.2 I-JAS のストーリーテリングの調査方法

I-JAS のストーリーテリングの調査では、調査対象者にイラストを見せて語ってもらい、収録するという方法が採られている。登場する人物の名前と旧日本語能力試験の2級以上の名詞は図1のイラストに記入されている。タスクを始める前に、ストーリーの内容を確認する時間が1分間設けられている。

### 3.3 分析場面

提示された4コマのイラストは、表5の4つの分析場面に相当する。ケン、マリ、警官という3名の登場人物がいる。ケンは主人公としてとらえられている。

表5 分析場面と登場人物の間でのインターラクション

場面	内容	登場人物同士のインターラクションの可能性
場面①	ケンが家の鍵を忘れる。	ケン
場面②	ケンが2階で寝ているマリを呼ぶ。	ケン ↔ マリ
場面③	ケンが梯子で2階に上がろうとしているとき、警官が来る。	ケン ↔ 警官
場面④	ケンとマリが警官に説明する。	 マリ ↔ 警官

## 4. 分析方法

分析に当たり、日本語のデータは、日本語教育学を専門とする大学院生1名とともに、主語や視点表現の評定を行った。英語、中国語、韓国語、ベトナム語のデータは、日本語教育学を専門とする母語話者大学院生に翻訳を依頼し、主語や視点表現を判定してもらった。

### 4.1 主語の視点表現

日本語では、主語は基本的に「～は／～が／ゼロ代名詞」で表される。以下の例1のように述語に対する主語をカウントする。

(例1) : [ケン] 鍵を持っていなかったケンは、家の外に締め出されてしまいました。[ケン] 中に入ってくれとマリに、言いましたが、[マリ] マリは寝ていて [マリ] 気付きません。  
 [ケン] ケンは仕方なく、[ケン] 梯子を持ってきて、[ケン] 二階の開いている（あいている）窓から入ろうとしました。ところが [ケン] そこを、警官に見つかってしました。[ケン] ケンは、えー警官に事情を話して、[ケン] 理解してもらいました。

(I-JAS の JJJ44)

### 4.2 述語の視点表現

述語に表れる視点表現は表6のように整理できる。受身表現、授受表現、移動表現という視点明示表現を使用してるか否か、または感情形容詞、思考・視覚動詞、文末表現という主觀を表す表現を使用しているか否かで判断する。

表6 述語の視点表現

	視点表現	言語形式
視点明示表現	受身表現	「Vれる」「Vられる」
	授受表現	「(Vて) あげる」「(Vて) もらう」「(Vて) くれる」
	移動表現	「(Vて) いく」「(Vて) くる」
主觀表現	感情形容詞	「うれしい」「ほしい」「好き」「怖い」等
	思考・視覚動詞	「思う」「考える」「わかる」「感じる」「反省する」等
	文末表現	「～ようとする」「～てしまう」「～ことにする」「～つもりだ」等

#### 4.3 談話での視点

話者は表6のように、視点明示表現や主觀表現に二分される多様な視点表現を使用しているが、これを談話レベルで見た場合、話者がこうした視点表現をどのように一貫して用い、どこに視点を置いて表現しているかを分析していく。視点の置き方は、以下の3つのタイプに分類できる。

- **タイプ1【固定視点】**：談話全体の4つの場面において、複数の場面、あるいは一つの場面で複数回、視点明示表現や主觀表現の使用があり、かつそれらの表現が視点を移動せず、一人の人物に視点を置く形で談話での視点が展開されたもの。
- **タイプ2【移動視点】**：談話全体の4つの場面において、複数の場面、あるいは一つの場面で複数回、視点明示表現や主觀表現の使用があり、かつ複数の人物の間で視点を移動する現象がみられるもの。
- **タイプ3【中立視点】**：談話全体の4つの場面において、視点明示表現や主觀表現の使用が1回しかない、あるいはまったくないもの。

それぞれのタイプの例は次のとおりである。

##### (例2)：タイプ1【固定視点】

場面	I-JAS のJJJ39 の発話	述語の視点の判定
場面①	ケンは鍵がないので、おうちに入れ（はいれ）ません	【中立】
場面②	外から呼んでみますが、マリは起きてくれませんでした。	【ケン】
場面③	なので、ケンは梯子を持ってきて二階の窓から入ろうとしました。そこで、けいさ、警官が、やって来て「何（なに）をしているのか」と尋ねられました。	【ケン】
場面④	そこで、鍵を忘れたという事情を説明して、わかつてもらって、話をしていたらマリは、マリが起きてくれて、無事おうちに入れ（はいれ）ました。	【ケン】

## (例 3) : タイプ 2【移動視点】

場面	I-JAS の KKD50 の発話	述語の視点の判定
場面①	で、うん、鍵がなくて、家にはい、あ、入らなくて、	【中立】
場面②	えっと外からマリをよん、マリをよん、呼んだが、マリは寝ていてそれを聞かなかつた、聞かなかつたです	【中立】
場面③	で、ケンはえっと梯子を使って、二階に上ろうと、上ろうとしていたが、警官がそれを見て、えっと泥棒、泥棒に間違つ、間違いました。	【ケン】→【警官】
場面④	そ、そしてマリは、マリが起きて、えっと警官に、うん、か、彼は泥棒じゃない、とゆ、と言って、警官は踊りました。	【中立】

## (例 4) : タイプ 3【中立視点】

場面	I-JAS の VVN47 の発話	述語の視点の判定
場面①	無し	
場面②	あ、ゲン（ケン）は、あ、ま、マリさんを呼びましたが、あ、でもあー返事がありません	【中立】
場面③	あーし、んーそれから、あー、ケンさんは、あ、は、梯子一をうーちかつて（使って）、あー、ううちにあー入りました。でも、あー、警官が、あー、ゲン（ケン）、ゲン（ケン）さんを、あー見ました。	【中立】
場面④	あ、色々、警官にせきめい（説明）してから、あー警官が、あーは話がわかりました。	【警官】

## 5. 分析と考察

## 5.1 主語の選択

表 7 対象者別の語りにおける発話文数（各群 n=13）

	JJJ	EUS	CCM	KKD	VVN
文数	68 {5.2}	72 {5.5}	110 {8.5}	50 {3.8}	75 {6.3}

{ } 内は平均値

ストーリーテリングにおける対象者別の発話文数は表 7 のとおりである。中国人日本語学習者の語りがもっとも長く、韓国人日本語学習者の語りがもっとも短い。日本語母語話者、アメリカ人日本語学習者とベトナム人日本語学習者の語りの長さは大きな差はない。また、文数と次頁の表 8 で示した主語としての登場人物の数を比較すると、どの対象者群でも複文が多用されており、複文中に主語の省略も多いことがわかった。

表 8 を見ると、どの対象者群でも主語を登場人物間で交替させていることがわかる。主語を統一するというのは日本語の特徴の一つであるとされるが、本研究では、日本語母語話者でも主語の完全な統一は見られなかった。しかし、日本語母語話者では、「ケン」が主語として登場するケースが圧倒的に多く見られた。特に、日本語母語話者は、主語としてのケンの省略は 45.9% であった。省略も含め、主語の数はケンが 62.5% を占めており、1 名当たりに 7.5 回程度、ケンを主語として扱っていた。つまり、母語話者はケンという主人公を主語に取る傾向がある。

表8 対象者別の語りに見られる登場人物の主語としての登場回数（各群 n=13）

主語の登場人物	JJJ	EUS	CCM	KKD	VVN
「ケン」	26 {2.0} (16.6)	32 {2.5} (28.3)	40 {3.1} (24.5)	25 {1.9} (21.0)	30 {2.3} (22.2)
「ケン」の省略	72 {5.5} (45.9)	23 {1.8} (20.4)	39 {3.0} (23.9)	30 {2.3} (25.2)	34 {2.6} (25.2)
「マリ」	26 {2.0} (16.6)	21 {1.6} (18.6)	33 {2.5} (20.2)	24 {1.8} (20.2)	24 {1.8} (17.8)
「マリ」の省略	6 {0.5} (3.8)	2 {0.2} (1.8)	12 {0.9} (7.4)	9 {0.7} (7.6)	10 {0.8} (7.4)
「警官」	18 {1.4} (11.5)	18 {1.4} (15.9)	25 {1.9} (15.3)	19 {1.5} (16.0)	19 {1.5} (14.1)
「警官」の省略	3 {0.2} (1.9)	7 {0.5} (6.2)	7 {0.5} (4.3)	10 {0.8} (8.4)	13 {1.0} (9.6)
その他	6 {0.5} (3.8)	10 {0.8} (8.8)	7 {0.5} (4.3)	2 {0.2} (1.7)	5 {0.4} (3.7)
合計	157 (100)	113 (100)	163 (100)	119 (100)	135 (100)

{ } 内は平均値 ( ) 内は %

一方、学習者に共通する特徴は、ケンという主人公の主語と、マリや警官としての主語の割合が半々程度であることである。つまり、学習者は母語話者より主語交替の頻度が高かったわけである。マリという登場人物が寝ている場面と、警官が登場する場面と、マリが再登場する最後の場面では、主語交替が頻繁に生じる様子が観察された。

さらに、主語の省略に関しては、学習者は日本語母語話者ほど多くなかった。学習者の中で、主語の明示の割合がもっと多かったのはアメリカ人日本語学習者である一方、主語の省略の割合がもっと多かったのは韓国人日本語学習者である。この傾向は、追加調査で収集したアメリカ人である英語母語話者（EN）と韓国語母語話者（KN）のデータに近いと見られる。つまり、母語で物語を描写した際、アメリカ人は主語を明示的に言及することが多いが、韓国人は主語をよく省略し、暗示的に言及していることになる。

本調査では、ケンという主人公はすべての場面に出ている人物である。談話の全体からみると、主語はケンと他の登場人物の間で交替する傾向がある。しかし、発話主題の視点ハイアラーキーとして、久野（1978）は「談話に既に登場している人物に視点を近づける方が、談話に新しく登場する人物に視点を近づけるより容易である」（p.325）と述べている。そこで、本研究では、新しい登場人物が出現した場面を中心に主語の選択を分析した。

静的な登場人物であるマリが出る場面②（新登場人物が寝たままで、直接に主人公とのインターアクションがない場面）、及び動的な登場人物である警官が出る場面③（新登場人物と主人公との直接的なインターアクションがある場面）では、主語がどのように扱われているのだろうか。「談話に既に登場している人物に視点を近づける方が、談話に新しく登場する人物に視点を近づけるより容易である」（久野 1978: 325）ので、場面②と場面③では、主語は他の人物よりケンを主人公にして描写する可能性が高いと予測される。ところが、結果は表9のとおりである。

表9 対象者別の語りにおける主語の統一者数と交替者数

	場面②					場面③				
	JJJ	EUS	CCM	KKD	VVN	JJJ	EUS	CCM	KKD	VVN
主語の統一	0	0	0	0	0	5	1	2	0	0
主語の交替	13	13	13	13	13	8	12	11	13	13

場面②では、日本語母語話者も学習者も全員主語を統一していなかった。つまり、主語はケンと他の登場人物に交替する傾向がある。次の例を見てみよう。

- (例5) : そしてー, [ケン] ケンさんはー, んー, 大きな声でー, うー, マリさんとー, はなし よう (話そう) としましたが, [マリ] マリさんは, 寝ています, 寝ていました。  
(I-JAS の EUS11)

- (例6) : あーそして [ケン] ケンはマリを, おー呼びましたが, [マリ] マリは寝ている夢中ですでの, [マリ] あーケンの呼び声 (こえ) をあー, きけー, 聞けーませんでした。  
(I-JAS の KKD20)

- (例7) : [ケン] 外からそっと, マリを呼んでみましたが, [マリ] マリはぐっすりと眠って, いて, [マリ] 起きてくれませんでした。  
(I-JAS の JJJ31)

例5～例7はいずれも主語はケンからマリに交替していることがわかる。「マリは寝ています」, マリは「ケンの呼び声 (こえ) をあー, きけー, 聞けーませんでした」, マリは「ぐっすりと眠って, いて, 起きてくれませんでした」のようなパターンが多かった。

一方, 場面③では, 例8のように, ケンという主人公で主語を統一する学習者も若干見られた。主語の統一に関しては, 日本語母語話者がもっとも多かった。

- (例8) : [ケン] ケンは仕方なく, [ケン] 梯子を持ってきて, [ケン] 二階の開いている (あいでいる) 窓から入ろうとしました。ところがそこを, [ケン] 警官に見つかってしまいました。  
(I-JAS の JJJ44)

しかし, 学習者のほとんどは次の例9と例10のように描写していた。新登場人物である警官が出てくると, 主語は警官に交替する傾向がある。

- (例9) : [ケン] うーうちにはい入る, ために, [ケン] ケンははし梯子を使って, [ケン] 二階へ行き二階へ行きます。[警官] その (連体詞) 時, ある警官が来ました。ケンは, ケンは [警官] 警官はケンを泥棒, 泥棒に認めました。  
(I-JAS の CCM08)

(例 10) : うん, [ケン] ケンケンさんは, 梯子で, うん二階の, うちの二階, 上りました。うん,  
 [警官] 警官, 警官, が見て, [警官] 泥棒と, 思います, た (思いました) がら (から) 一,  
 うん, うん, [警官] ケンさんと話しました。 (I-JAS の VVN43)

従来の研究では、日本語は主語の統一度が高い言語だとしばしば言われる。たとえば、奥津（1983）では、一度立てた主語は、必要のない限り、途中で変えないと述べられている。しかし、日本語母語話者であっても、主語を交替しやすい場面と主語を交替しにくい場面があるのでないだろうか。静的な登場人物であるマリが出現する場面②（新しい登場人物が寝たままで、直接に主人公とのインタークションがない場面）では、主語はマリに交替しやすい一方、動的な登場人物である警官が出現する場面③（新しい登場人物と主人公との直接的なインタークションがある場面）では、受身表現等が使用されていたため、主語は主人公に固定される傾向があった。日本語母語話者の語りでも主語が移動する現象は、田代（1995）、武村（2010）、魏（2010）、レ（2018）で指摘されている。実際には、主語を統一するかどうかということは場面や語りの人称が影響しているのではないかと思われる。特定な場面での主語の統一度は高いが、談話全体でみると、主語はいつも統一されるわけではない。本研究では、学習者はどの場面でも主語をほとんど交替させていた。学習者に共通する特徴としては、新しい人物が登場した場合、主語をそれまでの登場人物から新しい登場人物にする傾向があり、主語の交替が多いと見られる。

また、日本語学習者の母語のデータを各群 13 名ずつ分析してみると、英語、中国語、韓国語、ベトナム語でも、談話全体で主語を統一していなかった。特に、場面③では、日本語母語話者では主語の統一という現象が見られたが、英語、中国語、韓国語、ベトナム語では、どの母語話者でもそうした現象がまったく見られなかった。次は各言語の場面③のデータである。

(例 11) : There was a ladder next to the house. [ケン] Ken came up with a plan that [ケン] he could get the ladder, [ケン] climb into Mary's window and then [ケン] he would be in the house. NEE-NAW. There was a friendly police officer, [警官] he asked if there was something wrong.

和訳：家の横に梯子があります。[ケン] ケンは梯子を取って、[ケン] マリの（部屋）の窓に上ってから、[ケン] 家に入れるという計画を思いつきました。ニーノ（パトカーの音）。フレンドリーな警官がいます。[警官] 彼はどうしたんですかと聞きました。

(EN01)

(例 12) : [ケン] 他从仓库搬出了梯子。[ケン] 呃然后打算从 2 楼爬上去。[警官] 呃这个时候在夜间巡逻的警察路过，[ケン] 发现他正在梯子上，[警官] 呃以为他是一个小偷，[警官] 然后呃就把他抓住了。

和訳：[ケン] 彼は倉庫から梯子を運び出しました。[ケン] えっとそれで 2 階に上るつもりでした。えっとこの時、[警官] 夜中に巡回中の警察が通って、[ケン] 彼が梯子の上にいるのに気づいて、[警官] えっと彼を泥棒として認めて、[警官] それで彼を捕まえました。 (CN07)

(例 13) : 그래서, [ケン] 남편은 사다리를 타고, [ケン] 2 층 집 방으로 올라가고 있었어요. 그런데, [警官] 그 순간 경찰이 그 모습을 보고 [警官] 도둑이라고 오해를 해서 [警官] 대질했어요.

和訳: そこで、[ケン] 旦那さんは梯子をかけて、[ケン] 2階建ての家の部屋に上がっていました。しかし、[警官] その瞬間、警察がその姿を見て、[警官] 泥棒と誤解して [警官] 尋問しました。  
(KN05)

(例 14) : [ケン] Kent thấy cửa sổ còn mở nên [ケン] Kent đi lấy cái thang để leo lên cửa sổ. [警官] Lúc đó thì cảnh sát đi qua. [警官] Cảnh sát lúc đó mới hỏi Kent “vì rằng lại leo lên cửa sổ?”.

和訳: [ケン] ケンは窓がまだ開いていると気付きましたので、[ケン] ケンは窓に上るために梯子を取りに行きました。[警官] その時、警官が通りました。[警官] 警官はその時「どうして窓に上ったの？」とケンに聞きました。  
(VN10)

例 11～例 14まで見てみると、英語、中国語、韓国語、ベトナム語では、日本語と異なり、場面③の場合、ケンと警官とのインターアクションがあったが、受動文ではなく、能動文で描写する傾向がある。警官が登場すると、主語はケンから警官に交替させて描写していたのである。つまり、この事態では、英語、中国語、韓国語、ベトナム語では客観的に把握するため、動作者の視点で、物語を展開する傾向にあった。新しく登場する人物を主語に取るという母語の認知的傾向が、学習者の日本語の視点選択に影響を与えた可能性がある。

## 5.2 述語の視点表現の使用

述語の視点表現の使用は表 10 のとおりである。

表 10 対象者別の語りにおける述語の視点表現の使用（各群 n=13）

	視点表現	JJ	EUS	CCM	KKD	VVN
視点明示表現	受身表現	10 {0.8}	0 {0.0}	5 {0.4}	1 {0.1}	1 {0.1}
	授受表現	13 {1.0}	0 {0.0}	0 {0.0}	0 {0.0}	0 {0.0}
	移動表現	19 {1.5}	12 {0.9}	6 {0.5}	5 {0.4}	3 {0.2}
主觀表現	感情形容詞	0 {0.0}	1 {0.1}	8 {0.6}	0 {0.0}	0 {0.0}
	思考・視覚動詞	5 {0.4}	6 {0.5}	6 {0.5}	6 {0.5}	11 {0.8}
	文末表現	22 {1.7}	13 {1.0}	4 {0.3}	7 {0.5}	1 {0.1}
	合計	69 {5.3}	32 {2.5}	29 {2.2}	19 {1.5}	16 {1.2}

{ } 内は平均値

視点明示表現の使用に関しては、表 10 で示したように、日本語母語話者は学習者より受身表現、授受表現、移動表現の使用が圧倒的に多い。学習者の中でも、視点明示表現の使用傾向が異なっており、受身表現の使用がもっとも多かったのは中国人日本語学習者、移動表現の使用がもっとも多かったのはアメリカ人日本語学習者であり、授受表現は学習者のどの群も使用していなかった。

主観表現の使用に関しては、日本語母語話者は文末表現の使用がもっとも多かった。学習者の中でも、主観表現の使用傾向が異なっており、中国人日本語学習者は感情形容詞の使用が、ベトナム人日本語学習者は思考・視覚動詞の使用が、アメリカ人日本語学習者は文末表現の使用がそれともっとも多かった。一方、韓国人日本語学習者は学習者の中で主観表現の使用がもっとも少なかった。

以下、場面単位での、それぞれの視点表現の使用量と使用形態を分析していく。

### 5.2.1 受身表現の使用

受身表現は、場面③の「警官が声をかける」事態で多用されていた。

表 11 対象者別の語りにおける受身表現の使用量と使用形態（各群 n=13）

受身表現	JJJ	EUS	CCM	KKD	VVN
呼ばれる	0	0	0	0	1
呼びとめられる	2	0	0	0	0
咎められる	1	0	0	0	0
見咎められる	1	0	0	0	0
尋ねられる	1	0	0	0	0
質問される	1	0	0	1	0
注意をされる	2	0	0	0	0
言われる	1	0	0	0	0
見られる	0	0	2	0	0
叱られる	0	0	1	0	0
聞かれる	0	0	1	0	0
思われる	0	0	1	0	0
合計	9	0	5	1	1

この事態では、日本語母語話者のほとんどは例 15 のように視点をケンに寄せて、受身表現を使用して描写していた。その際、「警官に聞かれた」「警官に呼び止められた」「警官に咎められた」といった様々な受身表現の形態を使用していた。

(例 15) : えー、そこを、えー、通りかかった、えー、警察官にみと見咎められました。

(I-JAS の JJ24)

一方、アメリカ人日本語学習者は受身表現をまったく使用していなかった。韓国人日本語学習者とベトナム人日本語学習者は受身表現の使用者は各 1 名であった。中国人日本語学習者は学習者の中で、受身表現の使用が 5 名ともっとも多かった。しかし、使用していた受身表現の形態は日本語母語話者が使用していなかった形態であり、それは例 16 の「見られる」や、「叱られる」「思われる」であった。中級レベルの学習者は語彙の知識が限られており、教科書や練習問題によく出ている語彙を多用する傾向にあると思われる。

- (例 16) : えーだから、ケンちゃん、ケンさんはあーん、ケンさんはえっと窓からすあーす家、窓から家に、えっと入りたいので、えっとと、あの、うー、うー警察が、え警察が、け、あ、警察がえっと、えー見まし、警察にえんみ、見されました（見られました）。

(I-JAS の CCM49)

母語データの追加調査では、収集した 13 名の中国母語話者のデータのうち 4 名が次の例 17 のように、この事態で受身表現を使用していた。

- (例 17) : 然后他就爬梯子了。他找了个梯子想要爬到楼上去。然后被警察发现了。

和訳: それで彼は梯子を上りました。彼は梯子を見つけて、階上に上りたかったです。  
それで警察に発見されました。

(CN03)

一方、追加データの 13 名のうち 9 名がこの事態では、例 18 のように受身表現を使用していなかった。つまり、中国語母語話者はただ警官が来て、ケンと話したというように描写する人のほうが多いかった。

- (例 18) : 然后于是他这个男人他想要通过这个梯子爬到他们家，然后这个时候路过了一个警察，然后警察和他交谈。

和訳: そして、それで、彼、この男の人は梯子を通して、家に入りたいです。それで、この時、ある警察がきました。それで、この警察が彼と会話をしました。

(CN01)

同じ事態であっても、悪い意味、被害的なこととして事態を把握した場合、受身表現を使用しそうであるが、ただ普通に話しかける事態として把握すると、受動文ではなく、能動文で描写しそうである。英語母語話者（アメリカ人）、韓国語母語話者、ベトナム語母語話者のデータには、この事態の場合、受身表現が使用されていなかった。一方、日本語の感覚で考えると、この事態では、中立的に描写するより視点をケンに置いて「質問される」「言われる」という受身表現か「見つかってしまう」のような視点を表す文末で描写したほうが自然である。

では、学習者は受身表現を使用しない場合、どのように描写していたのか。次の例を見てみよう。

- (例 19) : えーその後（そのあと）、ケンは梯子で、うん一二階、うちの二階一に乗っています。  
それを見ると、んー警官が、質問します。

(I-JAS の VVN21)

- (例 20) : ところで、警官のいと（人）が、ケンにー、んーケンを見て、ケンに話をかけました（話をかけました）。ところで、警官のいと（人）が、ケンにー、んーケンを見て、ケンに話をかけました（話をかけました）。

(I-JAS の KKD47)

(例 21) : そしてケンは梯子一を、持つて、二階の窓まで、あー、のぼす（登る）と、あー、は  
ずでしたが、警官が来ると、ケンさんを、見て泥棒と、おもして（思って）、問題が、始まった。  
(I-JAS の EUS24)

(例 22) : そして、ケンは、あーはした（梯子）を探して、うーに、うー窓からはうーうちに入  
るつもりだんですが（つもりなんですが）、その（連体詞）時をあー一つおまわりさん一  
が、うーその（連体詞）、うケンを見ました。そして、「ほら、誰だ、止まりなさい」  
と{笑}よ、呼び、呼びく呼びました。  
(I-JAS の CCM48)

上の例 19～例 22 を見ると、学習者は警官が登場する事態では、ほとんどの場合、次のように  
描写していたことがわかる。

「警官はケンを見る」→「警官はケンと話す／ケンを呼ぶ／ケンが泥棒だと思う」

つまり、学習者のほとんどは受動文ではなく、能動文で描写する傾向がある。それは受身表現  
の習得に問題があるわけではなく、ただ母語の事態把握、いわば視点の捉え方や置き方が目標言  
語と異なっているからである。

### 5.2.2 授受表現の使用

場面②と場面④は、授受表現の産出が問題となる場面である。

表 12 対象者別の語りにおける授受表現の使用量と使用形態（各群 n=13）

場面	授受表現	JJ	EUS	CCM	KKD	VVN
場面②	気付いてくれない	3	0	0	0	0
	起きてくれない	2	0	0	0	0
場面④	わかってくれる	2	0	0	0	0
	起きてくれる	2	0	0	0	0
	わかってもらう	1	0	0	0	0
	理解してもらう	1	0	0	0	0
	聞いてくれる	1	0	0	0	0
	合計	12	0	0	0	0

日本語母語話者は「ドアを開けてもらえない」「マリが起きてくれない」「マリが気付いてくれ  
ない」「マリが警官に説明してくれた」のような授受表現の発想があったが、学習者は授受表現  
という発想がなかなか出てこず、うまく使えないようである。学習者が場面②と場面④で授受表  
現を使用していなかった理由は、日本語での事態把握と母語での事態把握が異なっていたからで  
あると思われる。母語での事態把握では、単に「マリが寝ているので、聞こえない」、そして「マ  
リは警官に事情を説明した」のように把握すると思われる。「気付いてくれない」や「説明して  
くれた」のような主観的な把握は日本語にしかないため、日本語の事態把握を身に付け、授受表  
現の習得が十分習得できなければ産出できないと思われる。

場面②では、学習者は、授受表現を使わずに、次のように描写していた。

(例 23) : あーん、だ、あーだからえと、あーねっている（寝ている）妻にえっうー大きいごえ  
 （声）で、えー、い、い、あー大きいごえ（声）でえっと、あん、あーい、大きい声で、  
 えっとー叫びたいです。 (I-JAS の CCM49)

(例 24) : そして、ケンはどる（ドア）ベルを、あ、押すと、でも、ケンの、あ、あ奥さんは、んー  
 寝ていまし、た。そしてケンは、呼ぶと、マリさんは、何（なん）でも、あ起きなかつた。  
 (I-JAS の EUS24)

場面④では、学習者は授受表現を使わずに、次のように描写していた。

(例 25) : その（連体詞）時マリが、おおこって（起きて）ー、警官のいと（人）に、あー、ケ  
 ンを見てこの（連体詞）いと（人）は泥棒じゃね（ない）ってー、話を、して、警官  
 の人が、はい、理解して、はい、終わりました。 (I-JAS の KKD47)

(例 26) : えー、す、あー、あー、警官と一話、話す、話した後（あと）でー、えー、マリーさ  
 んは、ケンさんのー、妻、妻ー、のことーがわかりました。 (I-JAS の VVN24)

また、追加調査の母語話者のデータ結果によると、場面②と場面④では、英語、中国語、韓国語、ベトナム語ともに、授受表現の使用がまったくなかった。「～てあげる」「～てもらう」「～てくれる」はもともと習得しにくく、学習者がどれを使用したらよいかわからず、視点をかえつて混乱させる文法である。本調査では、補助授受動詞の使用がまったく見られなかつたため、そうした視点が混乱する現象は見られなかつたが、日本語母語話者のような授受表現による事態把握という発想がなければ、日本語として意味が通っていても、事態の描写が不自然になる。授受表現は、学習者のどの母語にも見られない発想なので、日本語母語話者のように、授受表現を用いて事態を把握する発想を持てるようになるには時間がかかると思われる。

### 5.2.3 移動表現の使用

対象者別の語りにおける移動表現の使用量と使用形態は次頁の表 13 のとおりである。すべての場面で移動表現を使用することが可能であるが、移動表現が多く使用されていたのは、場面③の「ケンが梯子を持ってくる」事態と「警官がやってくる」事態である。表 13 で示したように、学習者の中で、アメリカ人日本語学習者は移動表現の使用がもっと多く、使用傾向が日本語母語話者に近かった。他の学習者群も移動表現を使用していたが、量としては少なかつた。

表13 対象者別の語りにおける移動表現の使用量と使用形態（各群 n=13）

場面	移動表現	JJJ	EUS	CCM	KKD	VVN
場面①	行く	1	1	0	0	0
	帰ってくる	2	0	0	0	0
場面②	来る	1	1	0	0	0
場面③	行く	0	0	1	0	1
	来る	2	7	4	4	2
	持ってくる	4	1	1	1	0
	乗ってくる	1	0	0	0	0
	やってくる	4	1	0	0	0
	上っていく	0	1	0	0	0
場面④	帰っていく	1	0	0	0	0
	起きてくる	3	0	0	0	0
	合計	19	12	6	5	3

日本語母語話者が使用していた移動表現はかなり豊富であった一方、学習者はほとんど「警官が来る」の「来る」しか使用していなかった。

(例 27) : そして、マリの名前を {咳払い}, 叫んだ? はい。その後（そのあと）で、警察は、  
來た。 (I-JAS の EUS50)

追加調査の母語話者のデータを見てみると、本調査では補助移動表現の使用が非常に少なかつた。収集したデータの中で、中国語母語話者の1名に「(梯子を) 運んできた」という補助移動表現の使用が見られたものの、他の母語のデータには補助移動表現の使用が見られなかった。

(例 28) : 所以、这个肯搬來了梯子想爬回家。

和訳：それで、このケンは梯子を運んできて、梯子を上ることによって家に入りたいです。 (CN02)

移動を表す「行く」「来る」という本動詞の使用は、学習者のほうが母語話者よりも総じて優勢であるが、補助移動表現の使用は母語話者に多く見られ、学習者には習得が進んでいないため、あまり見られないように思われる。移動を表す母語との形式が異なっており、また、特に「起きてくる」のような変化の過程を表す移動表現は中級学習者にとって難しい言い方なので、産出していくようである。次の例 29 は韓国人日本語学習者のデータで、移動表現をまったく使用していないかった例であり、他の学習者群でも同じ傾向が見られた。

(例 29) : あーそしてケンはマリを、おー呼びましたが、マリは寝ている夢中ですので、あーケンの呼び声（こえ）をあー、きけー、聞けーませんでした。あーそして、えーケンはあー

梯子を、梯子を利用して家に入る、入ろうと思いですけど（思いますけど）、あ一周りのけいけん（警官）さん、けい、けいけん（警官）、あ、警官さんがこれをん一見ました。そし、そしてこの（連体詞）声であー、マリはあ一起きて、あ一起きますので、それであーケンは家にはい、入ることになりました。 (I-JAS の KKD20)

#### 5.2.4 主観表現の使用

主観表現はどの場面でも産出される可能性がある。ただし、場面③では主観を表す感情形容詞、思考・視覚動詞、文末表現の使用が圧倒的に多く、また学習者の各群の使用傾向の相違がこの場面③ではっきり見て取れるため、以下では場面③を中心に、主観表現をまとめて分析していく。

まず、文末表現から見ていこう。表 14 を見ると、場面②の「ケンはマリを呼ぶ」事態と、場面③の「ケンが梯子を上る」事態では、日本語母語話者のほとんどが「～ようとする」という目前の予定を表す表現を使用していた。アメリカ人日本語学習者も韓国人日本語学習者も、この 2 つの事態では、「～ようとする」の使用が多く見られ、日本語母語話者と近かった。場面③の「ケンが梯子を上る」事態では、英語と韓国語では、日本語と同じく「～ようとする」がよく使用されており、母語と近い発想のため、英語と韓国語を母語とする日本語学習者は「～ようとする」の習得が進みやすく、産出できたと思われる。

表 14 対象者別の語りにおける文末表現の使用量と使用形態（各群 n=13）

場面	文末表現	JJ	EUS	CCM	KKD	VVN
場面①	帰ろうとする	0	1	0	0	0
	入ろうとする	1	1	0	0	0
場面②	開けてもらおうとする	2	1	0	0	0
	起こそうとする	1	1	0	1	0
	話そうとする	0	1	0	0	0
	呼ぼうとする	0	1	0	0	0
	寝ているようだ	1	0	0	0	0
	聞こえないようだ	1	0	0	0	0
場面③	行こうとする	1	0	0	0	0
	上ろうとする	2	0	0	0	0
	上がろうとする	1	0	0	0	0
	入ろうとする	6	3	0	6	0
	入り込もうとする	1	0	0	0	0
	ノックしようとする	0	1	0	0	0
	使えようとする	0	1	0	0	0
	入るつもりだ	0	0	3	0	0
場面④	納得してもらえたようだ	1	0	0	0	0
	出ることにする	0	1	0	0	0
	合計	18	12	3	7	0

(例 30) : So he found a ladder and tried to climbed up to the second floor.

和訳：だから、彼は梯子を探して、2階に上ろうとしました。 (EN13)

(例 31) : 하는 수 없이 켄은 사다리를 놓고 2층 창문으로 들어가려고 했어요.

和訳：仕方なく、ケンは梯子を置いて2階の窓に入ろうとしました。 (KN09)

しかし、ベトナム人日本語学習者は例 32 のように主観表現を使用せず客観的に描写する傾向がある。また、中国人日本語学習者は例 33 と表 15 で示すように「～たい」「～ほしい」のような意志を表す表現の使用が多かった。つまり、同じ事態であるが、母語によって事態の把握、視点の置き方が異なっていると感じられる。

(例 32) : あー、それから、帰る、か、うちへ帰る、時、大きい声で、話しても、マリさんは聞けませんでした。だからー、ケンさんは、はしご、梯子に、上りました。ま、あー、二、にけん（二階）の、にけん（二階）の、うちのにけん（二階）、に、あーはし、梯子に、上りました。 (I-JAS の VVN16)

(例 33) : だーしかしまりは、あー寝ていると、寝ている時ぜんぜん聞こえません。んー、そーそれから、それからケンは、あーばしご（梯子）をかーあー、かーりまし借りました。んー、んーそーおー部屋の、うー部屋の一あ二階一部屋二階一うーに一入、りー、は入りたい、はい入りえー、んー、たーはいりー、たー、入りたかった。

(I-JAS の CCM42)

表 15 対象者別の語りにおける感情形容詞の使用量と使用形態（各群 n=13）

場面	感情形容詞	JJ	EUS	CCM	KKD	VVN
場面②	呼びたい	0	0	1	0	0
	起きてほしい	0	0	1	0	0
場面③	入りたい	0	1	6	0	0
	合計	0	1	8	0	0

母語話者のデータを見ると、中国語母語話者は「～たい」という意志を表す表現を多用していた。また、場面③では、中国人日本語学習者には「入るつもりだ」のような発想も見られた。この2つの発想は日本語としてはいずれも正用ではない。しかしながら、そうした発想は例 34 のように、中国語のデータにおいて散見された。日本語と異なり、人称制限がない中国語では、第3人称の感情でも、「～たい」「～つもりだ」を使用したとしても違和感がない。そのため、母語の影響で、中国人日本語学習者はこの事態で「部屋に入りたい」「入るつもりだ」という発想が多かったと推測できる。

(例 34) : 呃肯晚上想回家, 但是忘记带了钥匙。然后他想从窗户喊已经睡觉了的 Mary, 但是 Mary 并没有听见, 也, 肯可能也不太想要打扰 Mary 睡觉, 所以拿了一个梯子, 从 2 楼窗户想要进去。这时候一个警察以为他是小偷, 然后阻止了他。呃但是最后这个肯解释了一下他是想回家。

和訳: えっとケンが夜に家に帰りたかったです。でも鍵を忘れました。それで、彼は窓からもう寝ていた Mary を呼びたかったです。でも、Mary は聞こえませんでした。そして、ケンも寝ていた Mary に迷惑をかけたくないかもしないで, 梯子を手に入れて、2 階の窓から入りたかったです。この時、ある警察が彼を泥棒として認識し、そして、彼を制止しました。えっとでも最後このケンは家に帰りたかったのだと説明しました。  
(CN06)

(例 35) : 他从仓库搬出了梯子。呃然后打算从 2 楼爬上去。

和訳: 彼は倉庫から梯子を運び出しました。えっとそれで 2 階に上るつもりでした。  
(CN07)

一方、ベトナム語では、この事態の場合は、視点や主観表現を使用せず客観的に描写するもの多かった。

(例 36) : Anh bèn lấy, a, bắt chiếc thang để leo lên và gọi Mary dậy để mở cửa cho anh

和訳: 彼は仕方がなく、あ、マリがドアを開けてもらうように、梯子をかけて、上りました。  
(VN04)

表 16 対象者別の語りにおける思考・視覚動詞の使用量と使用形態（各群 n=13）

場面	思考・視覚動詞	JJ	EUS	CCM	KKD	VVN
場面①	気付く	1	1	1	0	0
場面②	気付かない	0	0	0	0	1
場面③	思う	1	3	3	3	6
	思い出す	0	0	0	0	0
	思い込む	1	0	0	0	0
	勘違いする	0	1	2	1	0
	間違う	0	0	0	1	0
場面④	理解する	0	0	0	1	0
	わかる	2	1	0	0	4
	合計	5	6	6	6	11

また、表 16 で示したように、場面③の「警官がケンを泥棒と間違えた」事態と、場面④の「警官はケンがその家の住人だとわかった」事態では、日本語母語話者は受身表現や授受表現等で視点を移動せずケンに置いたまま談話を展開することが多かった。

(例 37) : ところがそこを、警官に見つかってしました。ケンは、えー警官に事情を話して、  
理解してもらいました。 (I-JAS の JJJ44)

一方、学習者にとって、ここは視点がケンから警官に移動する分岐点である。そのため、場面③の「警官がケンを泥棒と間違えた」事態では、「間違える」「わかる」「思う」のような発想が学習者に共通して多かった。なかでも、ベトナム人日本語学習者は「思う」と「わかる」の使用がもっとも多かった。

(例 38) : ケンが泥棒だと間違ったからです。その後（そのあと）ケンはお巡りさんに説明して、  
勘違いのことわかりました。 (I-JAS の VVN51)

以上の分析の結果、述語の視点表現の使用が母語によって異なることがわかった。母語での事態把握の違いにより、日本語の視点の捉え方と置き方とは視点表現の選択発想が異なっている。中級レベルの日本語学習者は、母語で多用していた表現を日本語でもよく使用する傾向があり、逆に、母語であまり使用されない表現であれば、日本語でストーリーを語る際に、日本語母語話者のような視点表現の产出が困難であることがわかった。

### 5.3 談話全体の話者の視点の一貫性の有無

ストーリーの語りにおいて話者は多様な視点明示表現と主観表現を使用しているが、話者がそうした視点表現を談話レベルでどのように一貫して使用し、どのように視点の置き方を定めているかについて、4.3 節の分類にしたがって分析した。結果は次の表 17 のとおりである。

表 17 対象者別の語りにおける視点のタイプ（各群 n=13）

視点のタイプ	JJJ	EUS	CCM	KKD	VVN
【固定視点】	10 (76.9)	6 (46.2)	2 (15.4)	1 (7.7)	0 (0.0)
【移動視点】	3 (23.1)	5 (38.5)	10 (76.9)	6 (46.2)	5 (38.5)
【中立視点】	0 (0.0)	2 (15.4)	1 (7.7)	6 (46.2)	8 (61.5)

( ) 内は %

表 17 で日本語母語話者は多くの視点明示表現と主観表現を使用し、【固定視点】で談話を展開する傾向がある。学習者の中で、【固定視点】の割合がもっとも多かったのはアメリカ人日本語学習者であるが、学習者は全般的に【移動視点】で物語描写することが多かった。【移動視点】で語った順位では、1 位は中国人日本語学習者、2 位は韓国人日本語学習者、3 位はアメリカ人日本語学習者とベトナム人日本語学習者である。学習者に共通する特徴としては、場面③ではケンに視点を置いて描写する傾向が見られるが、次の例 39 のように【警官が来る】事態ではケンから警官に視点を移動する現象が多く見られた。

(例 39) : ケンは何回（なんかい）も、マリを呼んでもマリは全然気づきませんでした【ケン】。  
 そしてケンはずっと外に待ってて、その後（そのあと）ケンは梯子を取って、ドアの前に置いておきました。家の中に、家の一窓に、入るために梯子を置きました。しかし梯子にのぼる途中でお巡りさんが来ました【ケン】。ケンが泥棒だと間違ったからです【警官】。その後（そのあと）ケンはお巡りさんに説明して、勘違いのことをわかりました【警官】。

(I-JAS の VVN51)

つまり、学習者は、視点を動作者に置いて、動作者を主語として描写する傾向があるので、視点明示表現や主観表現を使用せず描写しているのである。

【中立視点】を選んだ順位は、【移動視点】を選んだ順位とほぼ逆である。1位はベトナム人日本語学習者、2位は韓国人日本語学習者、3位はアメリカ人日本語学習者、最後は中国人日本語学習者である。ベトナム人日本語学習者はほとんど視点表現を使用していなかった。

追加調査の母語話者のデータを見ると、まず固定視点で描写する母語のデータはなかった。中国語母語話者は、述語の視点表現、特に主観表現の使用が多く、動作者の視点で描写する傾向が強かった。一方、英語、韓国語、ベトナム語の母語話者はいずれも、中立的客観的に描写する傾向が強かった。いずれの母語話者も、受身表現、授受表現を使用しておらず、たまに主観表現と移動表現の使用が見られるに留まった。

渡邊（1996）では、視点の捉え方に関しては、韓国人日本語学習者が日本語母語話者にもっとも近いという結論が示されているが、本調査では、韓国人日本語学習者は視点明示表現や主観表現の使用が比較的少なく、固定視点を好む日本語母語話者と異なり、視点の移動性と中立性が高かった。従来の研究では、対象となる韓国人日本語学習者が中上級日本語学習者であったので、日本語力が上級、あるいは上級レベルに近い学習者ならば、視点の取り方は日本語母語話者に近づいていく可能性がある。

本研究では、授受表現と受身表現の使用が少なかったため、従来の調査（武村 2010, ダンタイ 2017）の学習者の談話に見られるような、視点が混乱したわかりにくい発話がほとんど見られなかった。しかしながら、視点明示表現や主観表現を用いて視点人物に寄せて描写することが期待される場面で、中立的に客観的に描写するのは、談話を不自然にすることにつながる。

## 6.まとめと今後の課題

本研究は、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS) のストーリーテリングのデータを用いて、日本語学習者は、母語により視点がどのように異なるかについて検討した。2節で挙げた RQ とそれに対する回答をもって、次のようなまとめとしたい。

RQ1：主語の選択に関して、多言語を母語とする日本語学習者の間に、それぞれの母語によるどのような共通点、どのような相違点があるのか。

A1：母語の異なる日本語学習者の間で、主語の選択傾向はさほど異なっていなかった。学習者に共通した特徴としては、主人公を主語とする場合と、主人公以外を主語とする場合が半々程度であり、主人公を主語とする割合の高い日本語母語話者とはその点で違いが見られた。また、新しい人物が登場した場合は、学習者はどの場面でも、主語をそれまでの登場人物から新しい登場人物に変える傾向があり、主語の交替が多いこともまた、学習者に共通した特徴である。

RQ2：述部にある視点表現の選択に関して、多言語を母語とする日本語学習者の間に、それぞれの母語によるどのような共通点、どのような相違点があるのか。

A2：学習者の視点表現、すなわち視点明示表現と主観表現の使用は母語話者より少なく、形態の種類も豊富ではなかった。また、学習者の場合、視点表現の選択傾向は母語によって異なっていた。アメリカ人日本語学習者は移動表現と「～ようとする」という主觀を表す文末表現の使用が多く、その点で日本語母語話者と近かった。中国人日本語学習者は日本語母語話者と同じく受身表現の使用が多かったが、母語では人称制限がないため、一人称でなくとも「～たい」「～ほしい」といった感情形容詞の使用が多く、母語話者に違和感を与えるおそれがある。韓国人日本語学習者は視点表現の使用、特に主観表現の使用が少なかつたが、「～ようとする」の使用が多く、その点で日本語母語話者と近かった。ベトナム人日本語学習者は視点表現の使用が学習者の中でもっとも少なく、動作を主語とした「～と思う」「わかる」を多用していた。また、学習者のそれぞれの母語のデータと対照すると、学習者が母語で多用していた表現は、日本語でも過剰に使用していた。逆に、母語あまり使われない表現は、日本語でもあまり使っていなかった。つまり、中級レベルの学習者の視点表現の選択は母語の影響を受けている可能性が高いと言える。

RQ3：談話の視点の一貫性に関して、多言語を母語とする日本語学習者の間に、それぞれの母語によるどのような共通点、どのような相違点があるのか。

A3：談話の視点の一貫性に関して、日本語母語話者と異なり、学習者は【固定視点】で談話を展開する例は少なかった。また、授受表現と受身表現の使用頻度が低いため、視点表現の不適切な使用で視点が混乱し、わかりにくくなる現象はほとんど見られなかった。しかし、中立的・客観的に描写したり、母語の発想をそのまま日本語で表現したりする傾向があるので、主観的な表現を好む日本語としての違和感は残る。学習者の中で、アメリカ人日本語学習者は【固定視点】、中国人日本語学習者は【移動視点】での描写を好み、韓国人日本語学習者は【移動視点】と【中立視点】による描写が拮抗し、ベトナム人日本語学習者は【中立視点】で描写する学習者が多かった。

本研究を通じて、日本語教育における視点指導では、日本語学習者と日本語母語話者の視点に関わる表現の選択傾向の違いを意識させることが重要であることが示唆される。学習者には、場面、主人公、登場人物間の相互交渉の認知と、視点に関わる表現の選択傾向との関連を把握させる必要がある。また、学習者の母語別の視点の置き方と表現選択の偏り、および、母語による発想の影響と制約を認識できれば、母語別の指導法の改善へつなげることが期待できる。

## 参照文献

- 彭広陸（2008）「類型論から見た日本語と中国語：視点固定型の言語と視点移動型の言語」『第12回中日理論言語学研究会』、同志社大学 2008年1月13日（発表資料）。
- 趙華敏（2016）「主観性の相違による言語使用への影響について—中国語人日本語学習者が使う日本語を例に」小野正樹・李奇楠編『言語の主観性—認知とボライドネスの接点』53–68. 東京：くろしお出版。
- ダンタイ クインチー（2017）「ベトナム人日本語学習者の物語描写における場面の推移に伴う視点の変化」『一橋日本語教育研究会』6: 63–72.
- 福島建作（2018）「人為的事態の結果の「好まれる言い回し」—日本語と韓国語の自動詞表現と受動表現—」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』4: 177–190.
- 魏志珍（2010）「台湾人日本語学習者の事態描写における視点の表し方—日本語の熟達度との関連性—」『日本語教育』144: 133–144.
- 池上嘉彦（2012）「〈言語の構造〉から〈話者の認知スタンス〉へ：〈主客合一〉的な事態把握と〈主客対立〉的な事態把握」『国語と国文学』89(11): 3–17.
- 石黒圭（2006）「視点のメカニズム」『よくわかる文章表現の技術IV』197–219. 東京：明治書院。
- 金慶珠（2008）『場面描写と視点—日韓両言語の談話構成とその習得』東京：東海大学出版会。
- 久野暉（1978）『談話の文法』東京：大修館書店。
- 松木正恵（1992）「「見ること」と文法研究」『日本語学』11(9): 57–71. 東京：明治書院。
- 森雄一（1998）「『主体化』をめぐって」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』186–198. 東京：汲古書院。
- 茂呂雄二（1985）「児童の作文と視点」『日本語学』4: 51–60. 東京：明治書院。
- 中浜優子・栗原由華（2006）「日本語の物語構築：視点を判断する構文的手がかりの再考」『言語文化論集』27(2): 97–107.
- 奥津敬一郎（1983）「何故受身か？—〈視点〉からのケース・スタディー」『国語学』132: 65–80.
- 大塚純子（1995）「中上級日本語学習者の視点表現の発達について：立場志向文を中心に」『言語文化日本語教育』9: 281–292.
- レ カムニン（2018）「ベトナム人日本語学習者の产出文章に見られる視点の表し方及びその指導法：学習者の〈気づき〉を重視する指導法を中心に」東京：ココ出版。
- 謝文儀（2006）「第二言語としての日本語物語構築に見られる話し手の視点—学習者の母語と学習環境が及ぼす影響」修士論文、名古屋大学。
- 塩谷英一郎（2006）「「認知的」を考える」『帝京大学文学部紀要米英言語文化』37: 51–74.
- 武村美和（2010）「日本語母語話者と中国語日本語学習者の談話に見られる視座—パーソナル・ナラティブと漫画描写的比較—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』59: 289–298.
- 田代ひとみ（1995）「中上級日本語学習者の文章表現の問題点—不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる—」『日本語教育』85: 25–37.
- 渡邊亜季（1996）『中上級日本語学習者の談話展開』東京：くろしお出版。
- 渡辺文生（2012）「日本語の語りの文章における視点表現とその指導について」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』9: 51–58.
- 矢吹ソウ 典子（2017）「日本語学習者の談話における視点表現—日本語母語話者との比較から—」『Journal CAJLE』（カナダ日本語教育振興会 CAJLE）18: 90–112.

## 関連 Web サイト

- 多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS) (国立国語研究所) <http://lsaj.ninjal.ac.jp/> (2019年5月19日確認)
- 筑波日本語テスト集 TTBJ (筑波大学) <http://ttbj-tsukuba.org/p1.html> (2019年8月11日確認)

## Are Viewpoints of Intermediate Japanese Learners Different Depending on Their Native Language? : An Analysis from the Storytelling Data of I-JAS

DANG THAI Quynh Chi

Adjunct Researcher, JSL Research Division, Research Department, NINJAL

### Abstract

This study used the storytelling data of the “International Corpus of Japanese as a Second Language (I-JAS)” to examine how American, Chinese, Korean, and Vietnamese learners of intermediate-level Japanese use native languages to differentiate the viewpoints while learning Japanese. As a result, the subject’s viewpoint clearly displayed that each group of learners tended to alternate subjects in many scenarios, especially when new characters appeared, and this tendency did not differ depending on the native language. In addition, the perspectives of the predicates reveal that the frequency and variety of forms in using expressions differed relying on the predicates’ native language. The groups also distinctly observed the influence of the predicates from their native language. The following inference can be made postulating the whole discourse from the use of the viewpoint expressions of the predicates. American-Japanese learners have the highest percentage of fixed viewpoints in each group of learners, while Chinese-Japanese learners had the highest ratio of moving viewpoints, Korean-Japanese learners had similar ratios of moving viewpoints and neutral viewpoints, and Vietnamese-Japanese learners had the highest ratio of neutral viewpoints.

**Key words:** learner corpus, subject alternation, viewpoint expression, fixed viewpoint, moving viewpoint